

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

新云周文章 上

28  
7





あつよのひれからけきもーとよりのみけは  
 ひつりとほめてそのちみよよちていん  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 ようこもくもいけいあひあひ  
 けいこもくもいけいあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 のいふはひとちりよめいけいあひあひ

りあうーはまきねなるにはあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ  
 ちりけいこもくもいけいあひあひ

(あひあひあひ)

古海峽深渚の心之船首種言  
用之章を甚極不意如て我とて  
詩比字

座摩武社勢

後五位左近衛督朝臣實政

此の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に

此の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に  
世の心未だ云ふ事也花の世に

Main body of handwritten text on the right page, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of approximately 12 lines of cursive script.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 4 lines of text.





を本とせざるべし。さしつかへなく、  
しきりて、つらねる。信札のせむし、  
にんげん、

○物支と信支とを、又おのづか  
しきりて、つらねる。信札のせむし、  
にんげん、

また、て。物支のいろ、  
も紙とせざるべし。つらねる。信札のせむし、  
にんげん、

○消臭文のぶ。おのづか、  
は紙より、  
昔も、

昔も、  
昔も、

子たるものち。さびるものすふのこかづいて。いひたれは紙といひて。  
 も。文まはる。皆けはれまに。かつかも。いひて。ほ文も。何れも。  
 かく物をも。おひて。後よとのも。れは。よ。ち。あ。れ。よ。の。あ。り。と。れ。  
 も。や。い。な。も。け。田。金。れ。う。も。孫。の。の。も。文。の。だ。よ。い。な。も。極。  
 那。の。の。は。お。よ。た。の。の。ゆ。ゆ。の。あ。や。な。ち。そ。ふ。も。昔。の。れ。も。あ。さ。  
 は。思。い。え。う。ご。も。さ。さ。ぶ。の。の。紙。れ。文。ま。づ。い。を。や。り。く。文。直。の。  
 物。の。や。り。に。信。安。さ。ぶ。ち。笑。う。こ。な。れ。も。そ。れ。を。中。く。よ。い。ご。草。  
 いて。あ。よ。ひ。く。と。あ。り。つ。文。字。も。も。も。そ。を。不。ら。る。物。ま。づ。か。て。と。れ。  
 序。に。び。と。つ。二。つ。い。て。は。き。づ。自。し。は。は。と。り。く。は。母。經。行。解。  
 品。ふ。自。今。の。は。れ。新。き。子。と。え。え。も。相。續。と。り。す。登。り。品。ふ。衆。

苦次第相續不絶と見え。そ介提婆品に。大智徳勇健云々。下。信。解。  
 品。ふ。晝夜受苦必有休息云々。も。同。品。ふ。随意所樂可遊  
 戯云々。下。信。解。品。ふ。羅刹寶物出内取與云々。も。同。品。ふ。為。滿。  
 童子之新打擲云々。か。ど。い。え。な。ら。自。今。の。は。相。續。勇。健。休。息。  
 隨。之。家。物。亦。擲。な。ら。文。字。も。も。は。く。つ。い。別。き。る。日。用。先。  
 文。言。も。も。れ。を。越。て。信。安。さ。ぶ。出。た。が。多。く。い。は。る。下。陳。  
 此宣帝大達之。北周所造觀音像背銘に。家内大小康和云々。  
 といふことなげも。家内の文字も。あ。は。れ。ち。そ。を。合。  
 せ。考。へ。も。は。は。れ。ま。に。あ。は。る。物。の。い。は。る。紙。の。い。は。る。  
 ○上にいなるれ。は。は。れ。ま。に。あ。は。る。物。の。い。は。る。そ。を。考。へ。る。  
 昔の宣帝が。後文が。何れも。あ。は。れ。ち。そ。を。合。せ。考。へ。る。

ふざくよ。つておぼびくつ物にんごしつ。何哉。何よ。依はま。たゞの  
 類も。宣命のせはえと文まつる物さ。ぞ申す。依をえとせし  
 を。依はま。このせおし。何ぞをえとせし。依をえとせし。可  
 貴意。そはた。れどの教。ほ又せはの。文ま。つる。ね。又。法を  
 け。又。ま。ち。さ。う。そ。こ。河。入。お。ま。し。ん。ん。つ。よ。は。な。る。物。も。也。決。ふ  
 引。お。朝。お。軍。此。文。を。か。こ。て。も。ま。ご。う。我。る。を。字。音。み。ま。お。し。つ。も。  
 そ。ん。も。納。り。つ。奉。ま。ご。し。つ。物。ま。ち。又。ま。ご。し。つ。河。も。思。ひ。ぬ。  
 さ。う。し。も。ま。ご。し。つ。東。鑑。ま。ご。し。つ。雖。存。思。給。依。と。ま。ご。し。つ。  
 ま。ご。し。つ。教。り。つ。此。信。文。に。奉。存。は。は。せ。と。か。か。い。し。れ。な。く。山。朝  
 れ。つ。物。ま。ち。

の消息文をまごしつ物にんごしつ。思ひぬ。人のるに。昔乃武朝なり

此まごしつ物にんごしつ。引かて。は。ま。ご。し。つ。東。鑑。は。源。二。位  
 於。朝。お。軍。の。件。よ。り。蒲。の。討。者。範。頼。が。西。國。左。侍。の。ま。ご。し。つ。お。ま。ご。し。つ  
 う。ま。ご。し。つ。十一月十日の法。ま。ご。し。つ。日。六。日。お。ま。ご。し。つ。日。七。日。ま。ご。し。つ  
 脚。力。ま。ご。し。つ。ひ。つ。つ。行。ふ。け。法。力。お。ま。ご。し。つ。信。ま。ご。し。つ。方。ま。ご。し。つ  
 承。平。の。早。ね。能。感。の。の。形。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。思。ひ。ぬ。ま。ご。し。つ。あ。つ  
 此。物。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。能。く。國。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。搦。ち。く  
 國。の。老。も。に。ま。ご。し。つ。お。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。の。の。件。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ  
 よ。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。頃。博。を。何。し。つ。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ  
 お。の。づ。つ。ま。ご。し。つ。押。し。つ。れ。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。耳。も。ま。ご。し。つ  
 り。あ。つ。者。人。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。又。内。若。ま。ご。し。つ。用。防。の。せ。い。を。以  
 て。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。の。が。れ。ま。ご。し。つ。ま。ご。し。つ。國。の。者。れ。ま。ご。し。つ



方早くもなれども。のまをさかー思ふ方あれども。なをさか  
せる教。なをさか。異れども。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。

○なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。

○本文より。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。

の物。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。  
なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。なをさか。

なをさか 二年五月

上巻目録

- 年始の文
- 作事入る舞の文
- 上巳乃文
- 御年の文
- 日暮中見舞の文
- 七夕の文
- 申えは文
- 残暑見舞の文
- 幸陽の文
- 玄樑の文
- 同也

○雅言用文章

○片桐七

- 多言ふ人指の文
- 年賀の文
- 婚礼祝儀の文
- 之儀祝儀の文
- 年賀の文
- 縁辰を合の文
- 家督款の文
- 入学札の文
- 妻をいふ指文
- 仏書又人指文
- 末宮人指の文
- 同也
- 同也
- 管子祝儀の文
- 禱書祝儀の文
- ふ妻人指の文
- 出立款の文
- 後儀款の文
- まお前指の文
- 縁辰お前の文
- お前人指文

下巻目録

- 子日よけの文
- 梅見よけの文
- 春雨よけの文
- 産子指の文
- 時鳥をいふ文
- 雪をいふ文
- 御縁よけの文
- 夕立のよけの文
- おのちをいふ文
- 同也
- お前をいふ人の御きり文
- 御遊よけの文
- おのちをいふ人の文
- お前人指文
- 同也
- おの月よけの文
- 同也
- 同也
- 月をいふの文
- お前指の文

- 同也
- 初冬山をみたる文
- 春足よ人を招文
- 同也
- 川をさへる文
- 醫師を合の文
- 夕日并舞の文
- 同借月池文
- 寺樓を去るの文
- 芝居見物の文
- 夕夕質入の文

- 筆を絶る文
- 同也
- 同季にけしみの文
- 春よ絶る文
- 鹿脛見舞の文
- 夕日并舞の文
- 金子借月の文
- 新母子振舞の文
- 喧嘩挨拶の文
- 角力見物の文
- 奉公人情状

雑言用文章上巻

黒澤翁満著

○ 乙午始の文

射席の流夢が久ふ  
 有るは流夢の  
 之の意は安んじと成  
 法詔軍を止收作太  
 乙午はは後河車やと  
 交持をねりねり  
 と何れと何れ  
 初は緯きよ返る

○ 乙午始の文

物皆をうけつる中に馬はあつ  
 しくなれるばうり。めでたううご  
 けさるるかまふ人付るごうご  
 めれどいやうに。まをえさをた  
 ば。くまをたふる乙午のは後  
 いまにまをくう。うばうりが  
 けいん。さるハ初をのい  
 むしてふん。いれさるが  
 げはるぞ

打角は月を  
 遊作様存は  
 久廉末斗板  
 後紙は子板  
 車入は後作  
 主使あつて  
 以上

○同也

法は友持  
 新斗は佳俊

かし。はづとまき草のせもれ根かた  
 女はくもそけう  
 ちかくきのきけき。申しに  
 かし。おんづうい  
 たはれ物後  
 どのい  
 と。いし。けえは

○同也

こま  
 け

友中  
 法誠  
 法後  
 系  
 報  
 海

入法  
 出  
 法  
 法

おん  
 こめ  
 い  
 ね  
 を  
 や  
 又  
 ぐ  
 おん  
 ま

おん  
 ま

家内も互は侍中と作格  
中少は不位

○竹葉之舞之文

一平公つと仕は竹葉未  
込多くに之は色法勇  
勝成法を以て未は  
後存存に次は出方お登  
後を法ははくん保はお  
こころと下はち時依は  
あふれ何ふおははせ

こそ

○竹葉之舞之文

了れきこさへどがきりてこころまたまら。  
きはしきやがや。月の名もまははげごころま  
きさぶ。いづききしはごをたはる人。すけ  
おまほこころんこころん人。くれこま  
たはる中。おはごころんまごころん  
けり。いづききしはごをたはる人。すけ  
ささぶ。いづききしはごをたはる人。すけ

○竹葉之舞之文

おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ

○同也文

中翰友有海は島生  
まははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ

おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ

○同也文

おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ  
おははせ



ちとりの本様とまゝ  
おそ

るて付くは小者よはしんぞはあなま  
うてとん。かつかんかあはあやうーはしん人  
はつたあひもあなまをせまへん  
まはつちんやうー

○四巻の

は紙面よあお見え  
信好討名お本湯同  
まを存く御のあま  
思ふ松俊初言白あ  
叙めゆと離人死

○四巻一

うまごほんやあなまをせまへん  
うまもはのせくしう。あまかあは  
付あまごほんやあなまをせまへん  
ていんあまごほんやあなまをせまへん  
うたまおんあなまをせまへん

は庭あし花柳は花  
ま下先いほ石持は  
系を存く家内たる離  
毒を存くお物あ  
ふたあおは信くは  
おしあまあは信くは  
つと

○四巻二文

信午は信好と  
あやうは令具候

ま。あまごほんやあなまをせまへん  
はまごほんやあなまをせまへん  
かーあまごほんやあなまをせまへん  
あまごほんやあなまをせまへん  
あまごほんやあなまをせまへん  
あまごほんやあなまをせまへん  
あまごほんやあなまをせまへん

○四巻三文

あまごほんやあなまをせまへん  
あまごほんやあなまをせまへん

池せ、舟は初、懺、ふ  
一、は、張、の、あ、子、林、あ、  
軍、法、儀、に、成、は、儀、と、改、  
未、存、く、は、文、志、久、廉、  
未、存、を、了、る、を、傍、胃、を、  
双、入、は、儀、の、義、小、魚、一、條、は、  
儀、儀、の、下、を、お、原、か、ら、居、  
笑、納、て、よ、い、え、た、た、は、  
半、主、は、は、は、は、は、は、

○月返り

あ、の、こ、と、で、お、や、や、は、こ、は、お、ぎ、ん、く、  
し、う、も、こ、と、を、や、た、た、お、だ、ら、れ、ま、さ、こ、つ、を、  
ら、い、ま、と、お、い、え、た、ら、い、ま、う、く、ん、は、や、め、れ、  
松、乃、ぶ、ぶ、さ、た、ま、う、に、せ、ま、ま、た、か、こ、と、  
う、ぶ、ら、い、さ、う、う、い、ほ、さ、い、た、わ、い、た、い、  
た、ま、の、こ、か、や、い、こ、い、こ、い、さ、た、い、い、さ、  
さ、か、お、い、あ、い、あ、の、い、ま、う、い、た、ま、さ、て、ま、い、  
し、こ

○月を幸

存、存、を、存、存、と、存、下、存、  
入、か、い、え、い、は、ま、は、は、成、は、  
入、存、を、存、の、い、お、は、存、を、  
下、と、通、せ、お、さ、ら、う、た、知、身、  
初、懺、の、儀、儀、の、儀、  
又、儀、を、存、を、不、結、攝、  
傍、陰、曹、等、は、知、ら、ず、  
又、は、着、く、は、儀、と、下、り、  
は、儀、を、存、を、存、存、  
は、儀、を、存、を、存、存、

か、い、ま、お、ぎ、ん、く、は、初、存、く、ん、く、あ、う、  
し、ま、お、ぎ、ん、く、は、初、存、く、ん、く、あ、う、の、い、ま、お、  
た、ま、の、こ、か、や、い、こ、い、こ、い、さ、た、い、い、さ、  
さ、か、お、い、あ、い、あ、の、い、ま、う、い、た、ま、さ、て、ま、い、  
し、こ  
あ、ん、ま、づ、い、や、い、れ、い、ま、や、い、ま、  
ん、く、に、は、五、日、は、日、を、た、め、の、い、ま、  
く、け、い、て、は、い、れ、い、ま、や、い、ま、  
付、ら、お、か、い、は、い、ま、や、い、ま、  
お、ん、ま、れ、い、ま、い、ま、お、い、ま、  
ん、く、の、五、章、は、は、儀、を、い、ま、  
ど、や、あ、い、い、ん、い、ま、い、ま、い、ま、



何中より下斗は在る  
津物也

○同也

大用中より下斗を異教  
法は在る子速法安者  
相切て中に彼をよ給  
飛鳥くは法を何法は  
却る教者論多罪中  
法は法は在る是れを  
清浄に成法入在給る

はくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ

○同也

くまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ

此大異申為は人毎  
名を在る吉即首粉法を  
叔と下法厚志は法は  
厚法弟法厚くもは  
少くは思お便る事也  
くは其此一義折第  
任を耳掛法目は失ぬ  
法は海をて下は法  
後法報とくは法は作  
はる

とおぼくはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ  
くまはくまはくまの事入おぼくはせんぞ

○セウの文

セウははは河月か  
中納は津承及い乞巧  
兼はは規式を民  
ふ下後さささ  
甲おさし保さき  
あまの儀ささ  
菴もねたさ  
く中さ方中  
は幼女扱方

○セウの文

早合はえおが  
ささささ  
はうんぞは  
にたさ  
さ下が  
さねど  
はささ  
よいの  
やま

魂は事な

采か

は抄

朱懸

一

万

下

車

回

水

けが

おん

ま

ま

や

め

ら

こ

回

ぐ

唯

三



其魂亦くつらりて神  
秘もくもくびりては  
於此にてもおれ候と  
せは老いとは候やと  
初又候とて思は候判  
精力持とら向は候と  
下い候は老く候方  
支く候上と下とを  
さる一統は強し馬  
まゝに候は候物

なすいびんやうや。か  
んまうしやうや。か  
ちのびん。いびん。か  
例かものやうや。か  
つ利結のこものいびん  
ふんやうや。か。い  
さうばや。たが。か。か  
はら。い。い。い。い。い  
か。い。い。い。い。い  
し。い。い。い。い。い

よあはれと申す候と  
残是はとやうと  
る。い。得。れ。は。は。候  
何。あ。は。れ。と。申。す。候

○同也

業。は。候。は。候。は。候  
は。候。は。候。は。候  
短。下。辱。は。候。は。候  
は。候。は。候。は。候  
亦。是。く。や。う。と。申。す

か。り。て。は。候。は。候  
た。は。候。は。候

○同也

は。候。は。候。は。候  
に。は。候。は。候。は。候  
乃。は。候。は。候。は。候  
もの。は。候。は。候。は。候  
や。ま。は。候。は。候。は。候



○同也

秋の暮存存と云はれ  
殊異却つ秋波を存  
然つては指の端心  
法入の春と法授子  
交存存を不はま  
秋波水と春と交は  
存と改れ心と村  
と早懸る雨乞の  
秋

○同也

秋の暮存存と云はれ  
殊異却つ秋波を存  
然つては指の端心  
法入の春と法授子  
交存存を不はま  
秋波水と春と交は  
存と改れ心と村  
と早懸る雨乞の  
秋

念と方水及秋并成  
夜者くくく日我  
相傳て予と存と  
初格は日と存と  
こ

○同也

秋の暮存存と云はれ  
殊異却つ秋波を存  
然つては指の端心  
法入の春と法授子  
交存存を不はま  
秋波水と春と交は  
存と改れ心と村  
と早懸る雨乞の  
秋

念と方水及秋并成  
夜者くくく日我  
相傳て予と存と  
初格は日と存と  
こ

○同也

秋の暮存存と云はれ  
殊異却つ秋波を存  
然つては指の端心  
法入の春と法授子  
交存存を不はま  
秋波水と春と交は  
存と改れ心と村  
と早懸る雨乞の  
秋



麻酒一由名きく  
内多しこ中作体く  
去粒お粒作体中、  
はなしく上

○同也ゆ

侵下系之の湯罌  
固く為生作系録き  
は係事なみは去粒  
は粒後し造りし肉

くまわて。白ふれおのめかき海  
ぢぶふまらまははがれま。ぼく  
何うたやまへ。あしよひー  
とまもかきこいせもたか  
うしとちさうこ

○同也ゆ

つりぬはばいこも  
ごつ。其のこぼきお  
ごめは使こ。わい  
あさうらおまはら  
うしとちさうこ

系呂酒は粒さく下打  
お貴味く及系事ね  
なまはばおおねま  
去目こて及作の中合  
去く同法抜延くは法  
改申お作し上

○意亂丸孫の文

一筆格上仕は系  
こまはなしく得共

わねるは後た物をい  
付られ。いこようり  
いこら油なねだお  
おまかきこいせも  
わきんこもたか  
ーこ

○意亂丸孫の文

一筆格上仕は系  
こまはなしく得共





一書一信の力年暮  
一法一依の心由年暮  
能き心法は世に下  
歳之憂は依の作也  
は各早しといふ

○猪狩後儀之文

一筆筆始止は法は  
女後法儀は依は法  
極之儀はささく水は  
まよふとぬ法猪相

かしく猪狩の心  
まよふとぬ法は  
猪狩の心は依の  
筆筆始止は法は  
女後法儀は依は  
極之儀はささく  
まよふとぬ法猪

○猪狩後儀之文

まよふとぬ法は  
猪狩の心は依の  
筆筆始止は法は  
女後法儀は依は  
極之儀はささく  
まよふとぬ法猪

尾好相海子猪相  
海目か度法儀は  
法令本も極之法儀  
付録又是くぬ法  
心年作儀とす  
仍之猪狩の心由  
一法一依の心由  
表助能心作法  
法令本も極之法

まよふとぬ法は  
猪狩の心は依の  
筆筆始止は法は  
女後法儀は依は  
極之儀はささく  
まよふとぬ法猪

しよはあへ物にまへにけりか

○若子役儀の文

つれなきふんごもてしきこまぬい  
らむおらふいば中けけさうか  
んあつたはあ一ぬいのきしをけ  
たふちうか。はしき一が父の  
はあたれいふさうしあ付合  
さんああ。あさうあ。あさ  
中に桂さうかをあ非あ。あ  
しをなすあもあ。あああああ

○若子役儀の文

い世事は役向やと  
とて女法師息持と成  
出迎の世目とて女  
加ん持はあ母若子  
とをまへに一入  
あんと成作法儀  
あ存ん名憚佛内  
言授の儀はあ

祝詞は侍あつた  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ

○之後役儀の文

あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ

あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ

○之後役儀の文

あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ  
あああああああ

けおの法はさうあつ  
 法はさうあつと目  
 法は法は存する林  
 法は法は河の中  
 法は下地まゝあつ  
 法は法は河の中  
 物はさう

○徳見の法はさう

徳見の法はさう  
 徳見の法はさう

けおの法はさうあつ  
 法はさうあつと目  
 法は法は存する林  
 法は法は河の中  
 法は下地まゝあつ  
 法は法は河の中  
 おんさう

○徳見の法はさう

徳見の法はさう  
 徳見の法はさう

けおの法はさうあつ  
 法はさうあつと目  
 法は法は存する林  
 法は法は河の中  
 法は下地まゝあつ  
 法は法は河の中  
 物はさう

けおの法はさうあつ  
 法はさうあつと目  
 法は法は存する林  
 法は法は河の中  
 法は下地まゝあつ  
 法は法は河の中  
 おんさう

種少く至日麻草は  
法に其末を去り  
法に中は其を留り  
又其を平にす

○二十四節の文

此の文は其の法は  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法

其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法

○二十五節の文

其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法

其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法

其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法  
其の法は其の法

○七世の足舞の文

はし入根はくは其及  
 痛く後をふくは  
 法をたふむかす  
 分はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及

○八世の足舞の文

おのりたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ  
 しんせむたてしんせむ

力あふは世の法奉  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及

○縁取の文

法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及

とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは  
 とくはくはくはくは

○縁取の文

法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及  
 法はくは其及

仕は侍れ万一藤は海  
 後者といふをばるが  
 沢をいふ念入る自  
 我は心く及後世を  
 扱之方く後疾と承  
 り今に心くおふ物  
 内ふ心く侍り後木  
 さふ心く侍り後木  
 後世に心く是第一  
 後と承れく次也人

せせーたるまはせ入る  
 うろめたるまはせ入る  
 はせ入るまはせ入る  
 扱ふ人御入るまはせ  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る

後二十七年の事  
 願す女の上と承れ  
 神天然の英色十  
 分の上と承れ  
 後世に侍り  
 是れ第一の侍り  
 且又親又後も家柄  
 且又有侍り  
 別荘木も教へ不有  
 一層の侍り

せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る  
 せ入るまはせ入る

又外戚と相とる家  
筋と者之と母と侍  
まこと主人と能得琴  
作也法と在と極法  
縁と事存と得と一  
見合をてふては好方  
たふの我は同近月と内  
芝居法は人物法念と方  
在と極は女事存とを  
家と日月限法は極と

法とてとてとむふ。いふ人よまお人申  
ふいふお人。思つたお人。はとて  
ふとて。いさくも。かいて。おとて。い  
かたけとん。お人。お人。お人。お人。  
い。お人。お人。お人。お人。お人。  
け。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。お人。

上之方と如く極法  
汁と中と依つて及  
限内法と人と在と  
和と

○芝居法文

法は子承承ふは作  
法とて家損法と在  
方とて法とて法と  
り限中法と法と法  
母子授法と法と法

が。お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。

○芝居法文

刀自の刃れお人とお人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。  
お人。お人。お人。お人。お人。

三十一



根は法界智法讓與  
を法淨なる漸作者  
法は奉懐く法依  
を法界愛存作法  
美と平とよし得せは又  
すこ上法減減くを  
在と得せ別之ほあ  
法と成るきめて目  
法は依る存し未法  
老衰もきし法徳も

いとどけを給ふや。あふかた  
るくが。ねんもほさるもほつみれ  
おゆぐうかふんをさつんつた。一の  
君れ抽く。わぶく。たきをたかひん。  
るつらうは。う。あふん。いんあふん  
せぶ。あふん。あふん。あふん。あふん。  
い。う。かたふの。あふん。あふん。あふん。  
ん。あふん。あふん。あふん。あふん。  
は。あふん。あふん。あふん。あふん。  
う。あふん。あふん。あふん。あふん。

如法引義と成法後法  
法は依る存し未法  
と持受系上は能おもひ  
依は存く依る法少  
法は修持法未法系を  
依は依る存し未法

○入字釈の文

未にもよしの共益法  
勇健と成法存し未  
法は依る存し未法

れは法位ひよ引入をたふん。あふん  
びん。う。け。う。あふん。あふん。  
となん。あふん。あふん。あふん。  
う。あふん。あふん。あふん。あふん。  
ら。あふん。あふん。あふん。あふん。  
あふん。あふん。あふん。あふん。  
あふん。あふん。あふん。あふん。

○入字釈の文

あふん。あふん。あふん。あふん。  
あふん。あふん。あふん。あふん。  
あふん。あふん。あふん。あふん。  
あふん。あふん。あふん。あふん。

承傳と百發儀をいひ  
 其時儀をいふは根法  
 なる及承何法は下  
 おかりぬ館居の付先  
 此法門才し内にお延む  
 中は早速法承をい  
 作育する次第をい  
 存ん末も承をい儀  
 付法而儀て省法は  
 得た何の儀をい

一。おてきまぐらふか  
 も付ねども。うれる  
 くだびるく。うも  
 わらまぐらふ。う  
 もれぞれ。う。う。う  
 う。う。う。う。う  
 付。う。う。う。う  
 か。う。う。う。う  
 か。う。う。う。う  
 う。う。う。う。う

以下法指南に下を  
 記し得る。其の就吉辰入  
 學の仕度の方の法  
 根法指導を希ひぬ  
 法案内。其の法。其の  
 必新法。其の法。其の

う。う。う。う。う。う  
 う。う。う。う。う。う  
 う。う。う。う。う。う  
 う。う。う。う。う。う  
 う。う。う。う。う。う

○まがねの文

此法第一編。其の法。其の  
 此法は法。其の法。其の  
 此法は法。其の法。其の

○まがねの文

此法第一編。其の法。其の  
 此法は法。其の法。其の  
 此法は法。其の法。其の

幼穉の付やうに解ぬる  
 友と存ひ不富るるを我  
 徒とておぼへらるる所  
 ふ中の百類は昔号友  
 事存ひ何事信社伸  
 はか入る下法を信ら申  
 下いりて如何斗一を申  
 存ひし自号文章机ホ  
 是れとて事あるは後未  
 上を仕り同法入るを

もこころいひてはる。ちかちか  
 若し。終はは後青山を。いせはせ  
 をとてれんを。いひてはる。い  
 て。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い  
 何やと。いひてはる。いひてはる。い  
 一。いひてはる。いひてはる。い  
 あ。いひてはる。いひてはる。い  
 は。いひてはる。いひてはる。い  
 さ。いひてはる。いひてはる。い

下を存ひ且又久持  
 後派子一包はははは  
 笑細て下は柳法門入  
 こ下とこははははは

あ。いひてはる。いひてはる。い  
 は。いひてはる。いひてはる。い  
 い。いひてはる。いひてはる。い  
 け。いひてはる。いひてはる。い  
 くれ。いひてはる。いひてはる。い  
 め。いひてはる。いひてはる。い

○ 移徒執之文

存外早法善法は生  
 こは日柄好法財宅に  
 法教に生ひては法振

○ 後法執之文

ふい。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い  
 けい。いひてはる。いひてはる。い

振舞法 殺つて其目出  
 交法 傍を存りて  
 日次 法 物好法 礼法  
 法 其と事と其の物  
 屯積好交物と其の法  
 羨羨存り早速相  
 何れ也も仕る作は其  
 却つ法 其と成る  
 其と其 其の物  
 大法 其と其の物

くらわ... せ... せ...  
 だ。か... せ... せ...  
 つ... せ... せ...  
 三... せ... せ...  
 人... せ... せ...  
 中... せ... せ...  
 上... せ... せ...  
 け... せ... せ...  
 び... せ... せ...

作止作借

近習け 観念 相魚如  
 何 其の 其の 其の  
 同入 法 後 法 其 其  
 下 作 止

○ 妻と其の持文

近法 其 其 其 其  
 法 内 其 其 其 其  
 秘 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其

御書用紙

其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其

○ 妻と其の持文

其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其  
 其 其 其 其 其

御書用紙

法度も格も法入魂  
 小子の法徳も成る  
 法も度法も存作  
 如く愛中宗も世に  
 大程も世を後世同  
 横あり向は教も成  
 心も進も徳も成  
 世法中も物も成  
 此法も痛も成  
 上方も成も存作

どれくにしてさうらうらう笑ひは  
 りぞうの。はてあんな中のか  
 ね。吉祥た女もあんな  
 人をいふもあんな  
 こといふもあんな  
 刀自れあんな  
 あんないふもあんな  
 付一人あんな  
 こといふもあんな  
 こと。且も物もあんな

以上之は内室格の  
 法内と格の内助減  
 感伏は法貞節の度  
 此格も度は法依らぬ  
 法内と格の内助減  
 數金は法貞節の度  
 格も内と格の内助減  
 格も内と格の内助減  
 格も内と格の内助減  
 格も内と格の内助減

あんないふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな  
 こといふもあんな

吾授良友之教を父  
兄も多欲悪計ホも信  
有る縁何か合ま入物  
を締半授子ふい言を  
はせ信やとて我存人  
体信いふ漸く人等  
ありやんち者もと  
畢ふ父母の死別お伯  
母の苦責一紙十年の  
後戻之奥向ふ抱

やういふものが(づいゝまを)くまひの  
縁よりあつたおんぬて伯母のあつた  
にや一冊をきたる。十とひいゝまを  
おまの守むらひがへおまの守むらひも  
と入るものなぬつて入る。いゝまを  
きんたふんみり。ちねおまのわき  
おまのあつたのゆゑあつた  
のやううまのまをいゝまをいゝま  
んあつた。いゝまをいゝまのまをいゝまを  
たゝん。おまのいゝまをいゝまをいゝまを

いゝまをいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを

おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを  
おまのいゝまをいゝまをいゝまを

内根を直くは後金  
こつ我ら御ふらつてお  
る下はは所は御  
あふらつても伴は首  
刀かぬつては孰はま  
女は侍の叔別腹も御  
こもそお扱は一人は  
こゝろ大馬の芳をこ  
はの御りも侍りふ  
割るを御依る御事

かゝるこゝろかゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事

大牛能くして山は後  
をこつて相海ふや  
一笑して早こつ

○詠歌相法之文

おらつて後さやも御  
あつて地下さやも御  
さつてあつては我は博  
學の中はさつては自  
我もあつては下丸相  
慕は向はは中廣ゆ

○詠歌相法之文

は歌所乃草あつては  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事  
かゝる御事かゝる御事



明日去亡父一内忌  
 付於極暇を程はゆ  
 候りお頼かん依こ  
 夕親族せちる速東  
 と後仕に同何まは  
 遠いなるをいり申刻  
 いかは来かどいりお  
 哉藤末は河清光  
 とや交を存くをせ  
 初ま格おは入魂と成

けきちんはのまをさ  
 しめくうよめさけ  
 とを供養してのち  
 んとしてめんぐり  
 ことひはるまはら  
 いかぎさるのうい  
 ちむつを給さるや  
 はらぬいてまの  
 けしうめんよま  
 ちのむつびゆえ  
 ちのむつびゆえ  
 ちのむつびゆえ

下改倭終るを色  
 出ん程は後付は  
 下はり具位も可  
 とは是といは後  
 作

物とあひみえ  
 中けり  
 うまの  
 まぐり  
 めい

○神皇正統記

○神皇正統記

とむち  
 系  
 等  
 老

け  
 こ  
 て  
 お

厨より相半の法小父  
 扱方は同るゝ文は未  
 考と下りり大孝奉  
 存の神あり太神  
 糸の遊戯も有る衣  
 糸と神燈のつり振  
 と表法存の田舎恒例  
 とき海飲水法一舞  
 歌や反事存るほと

ひ。一思ふがふとくはねとたけりく日くれ  
 んけらる。おんたりやまやうかりり  
 て。かれううのこもれあまうびのぞう  
 ねううちううとおがきんくも我  
 けらううおまもくもてあてあて  
 里神樂さうへんか。んせおのいさ  
 じくうれ。夜もせせもはもんかぐて。  
 ばちちううおが。ばうんもあふれり  
 づれれ。一海飲水のせれ。海飲る  
 とらう。文かかきううか。

○茶室の舞の文

當年七正正の法茶室  
 之看集彩あはゆ然白  
 と法まの横も法茶室  
 法横は法は法とら  
 以分法面と申もを法  
 除取まの法後茶室  
 暫法林あまのなる  
 得せ法は法及色と法  
 と持く法と法と有る

○茶室見舞の文

ううう。おんせううう。ううう。ううけ  
 たらう。ううう。ううう。ううう。ううれ  
 ん。ううう。ううう。ううう。ううう。ううて。  
 おほう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。  
 もう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。  
 ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。  
 ね。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。  
 せね。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。  
 ううう。ううう。ううう。ううう。ううう。ううん。

倭と存れけきと何方  
 法通りとて有と云  
 實法と来法ととを重  
 羅法廻りと思ふと  
 りやたりの京大校  
 子及技匠とともあ  
 法見物と成て存  
 重者倭も仕業と御  
 仕の倭有と云同  
 事共存り法を以て

けぞ。やうく是はしつ  
 おん家ばとがもた  
 めれ。と云もいづ  
 うけり。ん。神  
 そ川のほは。係  
 なくと。承。都  
 け。そのい。か。ま。れ。を。始。め。て。は。は  
 む。わ。ら。う。れ。ま。の。ま。い。さ。い。さ。い。さ。い。の。い。の  
 老。女。の。ね。ほ。り。や。の。え。の。ほ。り。と。わ。ら。ま  
 け。も。と。お。し。た。ま。う。ん。う。ま。は。は。は。が。し。

存の甚は此倭少藤菓  
 一折法後に入中は法  
 納る下は切格は機  
 解法留まりて中は  
 老法又舞をこ早  
 新法は元は倭

め。う。け。ら。う。は。が。し。松。え。し。は。し  
 事。も。は。け。り。な。お。ん。と。ま。ま。は。や。う。な。う  
 う。び。い。で。う。わ。ら。う。思。つ。た。は。け。り。  
 け。お。び。つ。物。さ。ら。な。の。ね。ほ。り。と。わ。ら。ま  
 ー。ぞ。か。ら。う。れ。ん。な。か。い。こ。う。て。と。ま。を  
 た。さ。し。ま。ぐ。い。さ。や。し。は。は。は。は。は。は。は。は  
 け。あ。ま。の。ね。ほ。り。ま。ま。を。れ。あ。ま。の。け。り  
 け。え。や。あ。ー。ん

Handwritten notes and a red seal in the top left corner of the left page.

推言用文章上卷終

推言用文章

五三十一

三  
行  
記



推言用文章上卷終

推言用文章

四三廿六

